

『蕉軒日録』にみられる中日書籍交流の一縮図

著者	陳 小法
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	9
ページ	31-48
発行年	2012-03-30
URL	http://doi.org/10.15002/00022645

『蔗軒日録』にみられる中日書籍交流の一縮図⁽¹⁾

陳 小 法

はじめに

『蔗軒日録』は、室町時代中期、臨済宗聖一派の僧、季弘大叔の日記である。

季弘大叔、法諱は大叔、道号は季弘。別に蔗庵・蔗軒・竹谷道人・備陽山人・山陽山人とも号する。備州（備前か）の人。俗姓不詳。父の法名は明高。永享元年（1429）、九歳の折に備中願心寺にて出家、永享五年（1433）には上京し、東福寺護福庵において竹庵大縁に侍した。その後、一時備前に帰り、永享九年（1437）十七歳で剃髪して沙弥となり、永享十年（1438）には侍者となって再び竹庵に侍し、翌十一年、霊波百年忌陞座に際して、禪客を勧めた。この年、竹庵が示寂したので一時備州に帰休したが、文安元年（1444）七月には上京、その後、宝徳元年（1449）、備州に三度目の帰郷をし、翌二年、南英長能と共に上京すると、東福寺において蔵主を勤めた。康正二年（1456）三十六歳の時には、四度目の帰郷をし、またこの頃、大和の長谷観音に参籠している。長禄元年（1457）三月に上京、東福寺に居り、寛正元年（1460）より応仁二年（1468）まで、東福寺菩提院塔主を司り、その間、寛正五年（1464）には同寺において後堂首座となった。応仁の乱（1467～77）が勃発すると、乱を避けて南都に遊び、華嚴・法相を学んだ。文明十五年（1483）十一月十三日、乱後の京都を厭い、和泉堺に下向、十五日、海会寺に入院した。以後、この寺において余生を過ごしたが、彼はこの後、文明十八年（1486）末までの間に、日記を記している。これを『蔗軒日録』と言う。文明十七年（1485）正月十三日、中風の症状を呈し、一時小

(1) 小論は2010年中国教育部留学帰国人員科研啓動基金支援プロジェクト「日本遣明使与京抗大運河（教外司留〔2010〕1174号）」の成果である。

康を得たが、長享元年（1487）八月七日、海会寺にて示寂した。享年六十七歳。

季弘禅師は異常なまでの観音信仰を持つと同時に、浄土思想をも抱き、日々必ず観音讃一首を作り、『蕉軒日録』には、それが克明に記されている。著書として、『蕉軒日録』のほか『蕉庵遺稿』がある⁽²⁾。

『蕉軒日録』は天下の孤本であり、尊経閣文庫所蔵本以外に、他系統の本はない。東京大学史料編纂所には、その影写本が架蔵されている。尊経閣本は上・中・下の三巻三冊より成り、各冊の第一紙右下隅に「龍眠」の朱印があることから、東福寺龍眠庵の旧蔵本であることが分かる。また、その筆跡より見て、同庵中興の僧・剛外令柔の書写本であると判断される。

令柔は、林和靖の後裔と称し、観応元年（1350）、帰朝した龍山徳見に随侍して帰化した林浄因の子孫であり、清原宣賢に師事した林宗二の孫に当たる。桃山時代における一流の学僧であり、法を汝源令見に嗣ぎ、後陽成天皇勅撰の五山僧詩文集『翰林五鳳集』の跋文なども製している。剛外令柔が示寂したのは寛永四年（1627）八月七日であるから、彼が季弘大叔の日記を書写したのは、それ以前の、おそらくは慶長・元和年間（1596-1624）であったと推定される。しかし、令柔が大叔自筆原本から直接書写したかどうかは明らかではない。

現存の本日記の記事は、文明十六年（1484）四月一日にはじまり、同十八年（1486）十二月三十日に終わっている。すなわち、恰も季弘大叔が堺に逗留していた時代の日記であるが、これが果たして日記の全部か或いは残欠本であるかは、断定できない。また、本日記には以下の大きな欠如部分がある。

- 1、文明十七年（1485）四月二十二日から五月十日まで
- 2、同年五月二十九日から六月三十日まで
- 3、同年七月四日から十七日まで
- 4、同年七月二十日から二十九日まで
- 5、同年十二月一日から三十日まで

以上1・2・3・4の欠如は、前後の記事より判断して、季弘大叔の病状悪化による執筆の中絶とも見られるが、5の欠如と同様、原日記の一部が紛失したものも含まれるであろう。

尊経閣文庫所蔵の『桑華書志』には、

(2) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』、思文閣出版、2003年、73-74頁。

蔗軒日録上・中・下三冊、此本龍眠庵藏書、宝永丁亥夏感得之。

と見え、宝永四年（1707）に前田綱紀が龍眠庵より入手したことがわかるが、その後、前田家の篋底深く蔵されて世間にその存在を知られることはなかった。明治二十四年（1891）三月に、史志編纂掛（東大史料編纂所の前身）の手によって影写され、『大日本史料』に引用されるに及んで、漸く世人に知られるようになったものである⁽³⁾。

本稿では、東京大学史料編纂所が『大日本古記録』系列の一冊として、昭和五十三年に編纂した、岩波書店出版の活字版を、底本として用いた。

一、季弘大叔の閲読した漢籍

五山文学の勃興に伴い、漢籍の閲読も、多くの日本禅僧の日課の一つになったと思われる。病弱のため、外出などは控え目にしていた季弘大叔が、室内に籠り、書籍を以て一時の安らぎを得た日々は多かったであろう。その閲読した漢籍及び関係記事を、日付順に列举すれば、以下のようになる。

- 1、文明十六年（1484）四月二日、見『元史』子昂、虞集、晋卿、揭曼碩数人列伝。潛作『孟子私弟子伝』二卷。
- 2、四月七日、後藤兄弟至、学『医書大全』序、『事文類聚』続集第五“宮殿部”。徐仲雅宮詞云、内人睡起怯春寒、輕揭珠簾看牡丹。一把柳絲收不得、和風搭在玉闌幹。
- 3、四月十二日、発心読『景德伝灯録』。
- 4、四月二十四日、見『四教義』（天台四教義）。
- 5、五月十五日、読『宋学士文集』。
- 6、八月一日、看『莊子』。
- 7、八月二日、看『本天詩話』。
- 8、九月二日、看『扶宗集』⁽⁴⁾ 四・五・六段、肝要常可読也。看『林際録』⁽⁵⁾、

⁽³⁾ 東京大学史料編纂所『大日本古記録・蔗軒日録』、岩波書店、1978年、265-271頁。

⁽⁴⁾ 扶宗継忠編集、五〇巻。

⁽⁵⁾ 臨済義玄著、三聖慧然編、別名『臨済大士語録』、『鎮州臨済恵照禅師語録』、『臨済録』など。

毎日を課。

- 9、九月十八日、看『続僧宝伝』。
- 10、九月二十一日、看『東山外集』⁽⁶⁾ 書簡凡六集。
- 11、九月二十二日、看『伝灯』廿九以下、点灯照書、毎夜如此。
- 12、十二月六日、看『続僧宝伝』。
- 13、文明十七年（1485）一月二日、看『翻訳名義』⁽⁷⁾ 第一。
- 14、一月五日、看經者『最勝王經』一部。
- 15、一月八日、看『番尺名』⁽⁸⁾。
- 16、十月廿三日、予読『奇效良方』⁽⁹⁾、有観音応夢散之薬名。
- 17、十月廿五日、是日読『梵網經』。
- 18、十一月一日、看読『法華經』一部、本居士佩長男至、随董子学『大学』。
- 19、十一月廿二日、見『天沢集』、不釈手。
- 20、文明十八年（1486）正月八日、張伯仁所作之「舫斎歌」而読之、詞翰俱妙。
- 21、文明十八年正月廿日、読『蒲室集』。
- 22、正月十九日、見『靈源卑語』『蒲室集』『南遊東皈集』。
- 23、二月二日、蹟首座至、本居士至、共見新渡詩文。
- 24、二月六日、看『普賢行願疏記』並『科注法華經』。
- 25、二月七日、本居士至、共誦『千金方』養生篇。蹟首座所言、入唐之諸僧不知文字、受唐人之誚者不少矣云云。
- 26、三月十一日、『大明官制』大冊、景泰二年所著之書字略略涉覽。
- 27、三月十六日、看『奇效良方』。
- 28、四月五日、鈔『針灸資生經』下卷。
- 29、四月六日、看竺童所書『百法問答』。
- 30、四月十八日、看『南堂録』。
- 31、四月十九日、読『医書大全』⁽¹⁰⁾ 之次。

(6) 雪峰慧空著、別名『雪峰空和尚外集』、一卷。

(7) 法雲編集、七卷。

(8) 『翻訳名義』の略名。

(9) 著者は董宿である。

(10) 熊宗立編集、二十四卷、1446年刊行。

- 32、六月六日、慈祥至、檢『篆韻』⁽¹¹⁾。
- 33、八月十四日、句読『仏説高王観音經』、忍公所持至、大明新渡本一卷、是蓋『大士感應集』中之十句經所由出也。
- 34、九月三日、由為居士至、木工助号空智、偈於泉公、示唐人之字軸並子昂字之書、不可読、子昂恐不足信也。
- 35、九月九日、読『靈源録』。
- 36、十月十一日、看大明人之詩文。
- 37、十月廿三日、看『通論』第一。
- 38、十二月十六日、看『通論』第一。

以上、列挙した書名からわかるように、彼が閲読した漢籍には、医書や儒書も少なくなかった。注目に値するのは、第一に、内典が比較的多く、特に僧録や僧史に関係する書籍が多いこと。第二に、医書が多いこと。書名としては、『医書大全』『奇效良方』『千金方』『針灸資生經』などが見えている。これは、季弘大叔が中風を患っていたという個人的な事情を反映していると同時に、また、中日の医学交流の盛んな様子を物語るものでもあろう。第三に、明人の詩文を読んでいること。例えば、文明十八年（1486）正月八日には、張伯仁の「舫斎歌」を読んで、「詞翰ともに妙」と感じている。この張伯仁という人物は、明の寧波の人であり、文人兼医者で、日本人との交流が多く、入明僧にとっては馴染みの人であった。また、文明十八年二月二日には、隲首座と本居士の二人が来訪し、季弘大叔は彼らと共に「新渡の詩文」を読んでいる。この「新渡」とは、入明者が明朝から持ち帰ったばかりの詩文集のことであり、張伯仁だけではなく、他の明人の詩文も、同時にもたらされたものと考えられる。第四に、明から帰った隲首座によれば、入明僧の中には文字が読めない者がおり、唐人に笑われることも少なくなかった、という。後述するように、同様の情報は、隲首座からだけでなく、入明経験のある金子西という人物からも、入明者の中には文字を知らぬ者がおり、明人のそしりを受けるものが少なからずいた、という耳の痛い話が伝えられている。これは、十五世紀における入明僧の質の低下と、渡明メンバーの商人化とを示唆する記事であろう。

(11) 撰者不明、五〇巻。

二、季弘大叔の行った講筵

季弘禪師は応仁期前後における五山有数の学僧であり、朱子学に精しく、新注の『大学』『論語』『孟子』『尚書』を講じた。日付順にその講筵の内容を整理すれば、次の如くである。

- 1、 文明十六年（1484）九月一日、『莊子』為整子流読、蹟首座求『尚書』之講、予笑曰、及七十為老村儒、可乎哉。
- 2、 一月廿二日、為諸子談『論語』。
- 3、 二月三日、講朱注『論語』。
- 4、 六月十一日、宣徳天子所作『心経』（『般若心経』）序、命董童而写之。
- 5、 十二月五日、講『論語』。為紹上主講『大学』。
- 6、 十二月六日、為祖忌講『論語』。
- 7、 十二月十二日、講『大学』。
- 8、 二月十四日、『大学』講了。
- 9、 文明十七年（1485）十月（小）廿九日、慈祥至、寿侍者至、求予講『論語』、笑而不応也。
- 10、（閏）十月廿九日、教『少微家塾点校附音通鑑節要』于僧董。
- 11、四月十二日、大安寿侍者至、要予之講『論語』。
- 12、四月十三日、令董学『論語』。
- 13、四月十七日、次日令董、充二人学『新注孟子』。
- 14、十二月二十日、講『命吾』（『論語』）一唯之章。

こうした資料から、季弘禪師が、弟子たちをはじめ、同じ禅僧らに向けて、『論語』を中心に、朱子学を講じていたことがわかる。また、童子の董、充二人に『孟子』を勉強させるのが興味深い記事で、日本における『孟子』の流伝と受容の一側面が伺える。

三、金子西の入明見聞と漢籍交流

金子西（『隣交徴書』には「金子亞」とも）は、永享四年（1432）に生まれ⁽¹²⁾、

(12) 季弘大叔『蕉軒日録』文明十八年（1486）正月廿八の条に、「金湜今年七十一歳之人也、子西居士五十五歳」とある。

本名は雲英宗悦。建仁寺天潤庵（南浦紹明の塔）の門徒で、禪寺の書記にまでなったが、後に還俗した。文明十五年（1483）遣明使節の一員として入明したが、「金子西」という名は、この時明人によってつけられたものである。寧波では地元の文人張楷の一家と交流することが多かった。文明十六年（1484）七月十六日には、四明（寧波）の金湜が、彼の述懐詩に和韻している。

金子西は、帰国してから季弘大叔のもとを訪れ、明の事情について語ったが、その後もしばしば来訪した。大叔は子西から大陸の最新情報を聞くと共に、時々二人で「唐語」を楽しんだという⁽¹³⁾。

在明中、金子西は多くの書籍を渉猟し、その後、遣明船と共に帰国した。その喜びと満足の程は、季弘大叔との交流によく表れている。二人の交流を伝える記事を、以下に列举してみる。

- 1、文明十八年（1486）正月十二日、宗悦書記在東山之天潤庵、後作俗。癸卯入大明、去冬皈泉南。唐人字曰子西、名金也。是日問予而至、話及唐裡之事。（中略）張楷故居、扁君子堂、有三子。長曰応麒、次曰応麟。大才ノ（欠字あり）、長子ノ子曰応鵬、張天錫亦其人也云々。
- 2、正月廿六日、金子西袖唐人和答之諸作一裹而至。以鏹赤鑷兒一枚・鳳凰筆一管付予、可珍愛。唐人詩共誦之、為喜。
- 3、正月廿八日、大明一時文人之手翰一束持而至、共誦為樂。（中略）張楷集云『都台』、又有『畝田稿』『空谷録』。
- 4、三月二日、是日金子西至、余（欠字か）明日上巳辰、唐裡如何？答曰、賞桃花不如日本、尤賞清明。（欠字）谷道之日、賞楊柳、猶如日本上巳桃花云々。全室有「始知今日は清明」之句。第三之句、柳挿兩岸云々、清明云々。
- 5、三月十四日、金子西手其唐人所画之自像而至、張応麒作賛、画工者王氏之人也。予出雪舟所作之蔗庵軸而示之。西云、日本人甘蔗ヲ沙糖ト云、沙糖ハ甘蔗ヲ煎而所出之汁也、幼童ハ是ヲシヤカル也。寧波府南門金湜家有日本等楊所画三笑図、商山四皓図、壁之左右掛之。湜今年七十六歳也、大官人也、詩画俱妙也。楊之弟子等悦ト云者之画、在唐裡、

(13) 朝尾直弘・栄原永遠男・仁木宏・小路田泰直『堺の歴史—都市自治の源流』、角川書店、1999年、91頁。

人皆美之云。

- 6、三月廿一日、金子西云、唐人清明節賞楊柳、猶如日本上巳賞桃花。唐裡上巳不賞桃云。
- 7、三月廿三、晚金子西至、及大唐之話。酒盃如日本、礼ヲ深クセヌ也。酌トリ（欠字あり）也。二返目以再挙ト云也。サテヲケト云心ニハ、罷々ト云也。大酔シテ十字街上ニ露臥スル者イクラモアル也。唐ニハ馬蘭花イクラモ（脱アルか）。十字街頭馬之句アリ、下賤ノ職人ニイクラモ（脱アルか）。士人ノ親族（欠字あり）与日本異。乞食ノ内ニイクラモ官人ノテタチナル物アリ、但（欠字あり）物イカホトモフルク成テ、破レツキハイタル也。是モ不審ナリナトヤ云ホトニ、落フレハ、衣冠ヲハハカザルヤ。鄭汝寛ハ装演師子也、才人也。輿ヲハ四人シテ舁也。防州如此、九州ハ唐土一般也。事多也。大唐ニハ、舟人スム乞食乗破船、来往舟ノ人ニ物ヲモラウテ過身也。印籠ノハコニハ題図書合也。九州ノ人ハ舟中ニテ過一生、而妻子（欠字あり）栖者イクラモアリ。唐人無余念詩ヲ吟、人間ノキ事ナリ。（欠字あり）身（欠字あり）ヲ謝、喉下ヲ手ヲ以テヒキイダス、不知其如何ト云事ソ。対（欠字あり）是等ノ字、日本人書則唐人不知ト云也。把筆物ヲカ（欠字あり）ニメカクシ見事マデ也。本難ハ難之字也。子西至所語、大方カタカナニカキオク也。之老唐土ノ事ニスク（欠字あり）ト如此也。年老而身病、不可往大唐。サテ如此云々。
- 8、四月三日、是日子西以八分所書之韋蘇州一絶、付于薰上主。以唐人所書石刻販去来兮詞印本、付于識童。
- 9、四月六日、金子西居士以『針灸資生經』上卷、送而見借、終日覽消永日。
- 10、四月八日、金子西居士至、話及河内、銀万、文錢万、張天駿草字妙（中略）。子西云、唐裡之人愛画、八幅一對、四幅一對、柱ニハ五七絶之句ヲ一聯書メカクル也。一切之物斬新ニメ、ソコエヌナリ、エカキ句ヲ書テウルナリ、髪ヲハマヘカミソリニソル也。唐人十指之爪各長、問之答曰、士文彩ナリト云。問文字、必以中指カイテミスルナリ、サヤウノ時、長爪イル也。以長指爪援筆、物ヲ書妙也。爪ノ中ニハ無些垢、如水精也。爪ノ長者、譬如叢林人品兄弟者如此。東班以下者、ツメミシカシ、何ヲ云トリツカムホトニ。

- 11、四月十九日、子西至、以九鼎所書之『百法問答』三冊為借。話云、天竺僧・回僧・喇嘛僧、相好魁偉、実大国之人也。韃人ハ與ト畜類同者也、飲啖無所忤焉、只耳垂金環之事、與余国異而已矣。此時外国朝者、殆乎十ヶ国云、唐衰之僧、戒律不禁嚴、道士之輩、戒法極嚴、犯者有罰、俗中亦有持大念珠誦咒唱号者。唐人知倭人之飲食不猥矣。(中略) 交易之老夫一人、備之福岡人、持天与禾上入大明、遊天童、図其境、唐人作詩者大幅而至。
- 12、四月廿六日、金子西至、寧波府者古之鄞也。鄞江・浙江。猪肉之内、其重頭。日本人ブタト云也。禪録有懸猪頭壳狗肉之語、以貴物替賤物之意乎。殺鶏、鵝與殺蟻・蚊同、倭人悲則唐人笑之。猪者被殺悲叫不可忍也。羊ハ被殺之時不悲鳴、日本ノ鯉魚類之。禽獸殺時、受其血而用之。蚊帳床ノ四角各立柱、囲碁、倭之紀七郎與唐人囲碁、好匹敵也。子西藏鄞江別意図云。
- 13、五月九日、此日金子西至、唐人接倭人之時放炮、震威之意也。先爐香、辟穢氣之意也。唐人絃哥音妙也。各立絃立哥也。且絃且哥、亦在之。
- 14、五月廿六日、午眠時金子西及、唐裡之話。(中略) 還『百法問答』於子西。
- 15、六月一日、子西書張式之系図及万大人事跡。
- 16、六月三日、次日、子西與梅侍者同至、過其父之宅飯路、用家常之飯而談論。予問云、唐人平民用美味之食否？答曰、不然。似粥不粥底之物、入大桶、五六人、七八人環坐而食之。魚草加塩而啖之。其艱甚于倭人云云。
- 17、六月廿四、子西居士至、為大明之話。予日本ノ小便ト云者之形ヲ問。西曰以(缺字あり)及銀兩造之、満之小便云。可怕々々、不用云々。唐人見其穴大、云大療而笑之。療トハ根事也。人ヲノル時作酒器云々。你底療子一般ト云。瞽者彈比巴、日本同矣。問曰、日本有無？答曰、有。
- 18、七月五日、子西至話。今湯川新兵衛入道送子西荷、乃使招充子西。子西至、喜甚、以荷物托於忠書記之寮而去云。
- 19、七月八日、見子西所投之張式之『飯田稿』、慰病懷者為多。(中略) 由為至云、写龍眠所画之陶淵明像、付人求賛張仲暘。仲暘、楷孫也。由為携而至、並謹節之二大字、雄健有法。
- 20、七月廿二、子西臨席、話及江南之事々。金陵城中禁日本人而不許入。

- 21、七月廿七日、昨日子西手『救急方』一本至。
- 22、八月廿四、子西至、唐人沙糖煮栗而食、味甚妙。
- 23、九月二日、子西至、大明之新話件々。
- 24、九月五日、子西至、手張楷『飯田稿』而還。
- 25、九月十五日、子西至、手唐扇、楊守陳題詩、張応騏和之。都台令嗣帽烏紗、新築茆亭澗水涯。了却残涯捲簾看、白雲分葉浪添花。伯仁親契、久別不任懷仰、寄此以見意、鏡川楊守陳書。雨晴山色映窓紗、白首窮經遯海涯。遙想玉堂人樂處、笑談風月對荊花。張応騏和。
- 26、九月廿日、子西至、老圃殘菊散席之次見聞、及唐話。
- 27、九月廿八、子西云、唐土ニハ異端者多矣、『朱氏大全集』ハ晦庵一生之文集也。
- 28、十月十日、子西・隲首座皆至、大明人詩文画並『空谷録』等手而至、觀而頗慰懷矣。
- 29、十月十二日、子西送『大明珠玉草帖』共三冊而借之。
- 30、十月十七日、子西至、唐話移時。北京玉河橋辺、有鬻文以備于生業、曰燕文輝。問之他之文人、文人皆賤之、勿求彼所作之文飯日本。大明之河可媿也。見文輝之文、不可以太不好。子西手『凱歌唱和集』一卷而至、並詩二道、手跡妙也。
- 31、十月廿四、子西携白璧一盤而至、慰夜寒、招寺衆賞之。子西以盆二枚付予、『灸經』二卷、福寿印一ヶ各付予、可喜々々。唐顗一ヶ、上下有筆、当寺所借、皆弁之、祝々。
- 32、十一月二日、子西携張天駿草書而至、太莫而不可読。
- 33、十一月十八日、子西至、求題、々遊仙枕。

こうした記事を見れば、金子西が、大叔に対して如何に頻繁に中国での体験を語っていたかがよくわかる。彼の入明見聞談の内容は、以下のようにまとめることができる。

第一、明国の文人の情報。寧波人の張楷一家をはじめ、金湜・張天駿などとの交流の様子を語っている。勿論、北京の文人燕文輝についても詳細に話しているが、中でも張楷一族とのかかわりが特に深く、帰国後は張氏一家の系図をも製作しており、その傾倒ぶりが伺える。金子西と張楷一家との交流の詳細は、

海老根聰郎氏の研究を参照されたい⁽¹⁴⁾。

第二、明人の風俗。例えば、明人が清明節で楊柳を鑑賞すること、飲酒の作法、漁夫の生活ぶり、家禽を殺す時の平気さ、指の爪の長さ、倭人を迎える時爆竹を鳴らすこと、便器の形、盲人が琵琶を弾いていること、男根の大きさ等々、明の風俗に関わる様々な世間話をしていることがわかる。

第三、明人の食生活。豚の頭が好き、甘栗を食べる、食品は倭人より少ない、禽獣の血を食べる、といった記事が見られる。

第四、宗教のありかた。僧侶の戒律は緩んでいるが、道士のそれはとても厳しかったこと。

第五、家屋内の様子。画が好きで、壁によく八幅或いは四幅をセットにして張っていたこと。柱には大抵、対聯が張られていたこと。蚊帳とベッドの四角に柱が立っていたこと、などである。

こうした入明見聞談のほか、金子西からは書籍を初め、扇・盆・印鑑・書道・筆など、様々な明の土産が贈呈され、書籍では、詩集と医書が多かったことがわかる。季弘大叔は、中でも明から持ち帰った新詩文を待ち焦がれていたらしい。時々金子西と共に渡来したばかりの詩文を朗読し、それを大変に喜んでいたようである。このような新作品への期待は、まさに多くの禅僧が遣明船に関心を持つ重要な理由であったと思われる。

四、危篤期間中の漢籍処理

本日記が始まる文明十六年（1484）四月一日から、それが終わる同十八年（1486）十二月三十日までの期間は、ほぼ、季弘大叔が病魔と闘った日々であった。中風の症状は一時的に良くなることはあったが、体の具合は、総じて、いよいよ悪くなっていった。友人から色々な医書を紹介してもらったり、特効薬を見付けようとしたり、入明者が新しく持ち込んだ医書を丹念に調べたり、また、針灸や漢方薬なども様々に試してはみたが、結果はやはり、だめであった。そこで、季弘大叔は、自らの意識がはっきりしているうちに、寺院に所

⁽¹⁴⁾ 海老根聰郎「寧波の文人と日本人—十五世紀における—」、『東京国立博物館紀要』一一号。

蔵している本や、友人から借りた本、友人に貸した本など、一々その処理方法を日記に細かく記録していった。書籍好きな季弘禅師にとって、本ほど大切なものも少なかったろう。

- 1、文明十七年（1485）二月四日、予疾反復不可期、因記於茲云。

『首楞^{ママ}ム經疏』、唐本、皆泉涌寺秘本也、大乱散失、予集取之去、一期之後、須還之泉涌友雲伴師。

『中岩語録』二冊、宜還之東山妙喜庵讚首座。『放牛録』二冊、宜還之法觀寺緣西堂。

『文倭抄』自十八以下至四十二全部宜還之濃州極樂寺廷齡西堂。

『五灯会元抄』十冊、宜還之防之保寿惟三和尚。

『瀬翁録』二冊、可還東山定恵院文紀禾上。

『鄂隱録』二冊、可還結上主、崇徳寺。

『名義集』可還之少林寺主翁。

『金剛經附録』上卷在正宗禾上之方、下卷在此方、一期之後、宜合而獻之正宗禾上、遺物之意也。

『事文類聚』大安寿侍者可還之。

『元亨釈書』『印銷翁』『韓文』『聖学指要』宜還之三汝川上主也。

『詩学大成』一部、充恃可密之、先師本也。

- 2、二月十日、正覚寺開山実田和尚家本『伝灯録』一部、有箱、並『太玄經』一卷、彼寺住持南禅寺悟首座去年春持而至、見仮予、予一期後、薰上主持而往、懇謝可還之、勿怠勿怠。

『万年歡』三冊・『大同庵祖師在山和尚語録』『韶陽禾上語録』一冊、作州納之、密之莊嚴藏院之庫内、予所望也、不可出院内。以後万一大同派有人求之、以衆議可渡之。

『万年録無双言句』可秘也、門中衆宜写留者也。

『韶陽語』、門衆可看之、何モ不可失也。

- 3、二月十二日、正覚寺住持悟首座『伝灯』『太玄』『薰上主持謁』、可述懇謝、兩処記之、以不可忘之故也。

『敕修清規』全一冊、好点本也、在印銷翁方、見還之。

『潜溪集』二冊、唐本、宋景濂文也、猶在銷翁方、是者同聚家宝也。智

侍者十年以前見仮予、於今不還。愚夫一期後、『潜溪』二冊宜還之於惠徹首座。不然則智聚溪可還、整子可說此意。

文明十七年四月二十一日には、死後品物を遺贈するよう遺言を記録しているが、そこには「書本の蒲室集の小本一部は存畊祖黙の書写したもので汝川正三の秘本だから、彼に返すように」と書いている。その遺言の中には、古文集成・東坡詩抄・東山外集抄・元亨釈書・禪本居士書本・人天眼目・心要・友山録・南山録・柳文五百家などの書名が見え、その返却先が示されている。柳文は、絶海中津に関係のある書で古桂の持物だとある。禪僧間に書物の貸借があった様子を垣間見ることができる。

五、禪僧同士の漢籍交流

一個人或いは一寺院の蔵書量はあくまでも限られたものであるから、季弘大叔にとって、知人との間で書籍の交流を行うことは、少しでもそれを解消するための、重要な手段であった。また、知人と共に新渡来の中国書画を鑑賞することは、生活の楽しみの一つでもあった。

- 1、文明十六年（1484）六月十五日、與老和尚（天圭中瓏）対談曰、『医書大全』載歷代医師小伝。宋朝有劉禹錫、本草亦有禹錫、不可信也。蓋掌禹錫也。宋元祐間有掌禹錫者、文人而且有医学云云。又曰、医書有阻病之二字、不可解也。
- 2、七月八日、球上主・寿侍者二人至。寿者唐人、号仙圃、作説、手『鶴林玉露』而至。
- 3、九月十一日、本居士至、法花（『法華經』）一部書而送與阿比戸屋云。
- 4、十一月廿日、正法寺忍上人（梅圃証忍）手所求之『四書』而至。
- 5、文明十七年（1485）三月十八日、少林住持立外史以『普灯録』一部見仮。
- 6、閏三月七日、作仮状西嶽之鉄牛西堂『燕石集』云。
- 7、四月廿一日、『事文類聚』二冊、莊巖返弁。
『六物弁訛』一冊、真乘六物西林寺東へ可返也。
『普灯』、少林寺。
忍上人『四書』並『梵字初心抄』可送少林。

『古文集成』、長識似合故付之、但二人可。『坡詩』全部、整上主二面二付之了。

『東山外集抄』一冊、南伯西堂へ返之。

『柳文五百家』一部、赤表紙、勝定派識上主号古桂本也。被請之時可返之。

『蒲室』小本一部、在京、是ハ存畊ノ所写也。汝川秘本也。可返於三汝川者也。予借之。

『新注四書』一部、正法寺忍上人本也、少林寺可進置也。

- 8、五月十四日、返『景德伝灯録』於正覚寺。
- 9、十月八日、本居士手所写之『顔氏家訓』而至。
- 10、十月九日、松侍者手『灸経』一冊至。
- 11、十月十一日、大仙至、手『孫氏疏注』。
- 12、十月廿一日、本居士袖『顔氏家訓』而至、治家之段、予読而使居士聴之、喜甚。
- 13、十月廿二日、松侍者手『奇效良方』而至。
- 14、十一月廿四日、松侍者袖『奇效良方』二冊而至。
- 15、十一月廿六日、長能上所抄書之『一切経』拔書七冊、可謂此老平生苦学。
- 16、十一月廿九日、慈祥手『篆韻』上下二冊而至、借与。
- 17、文明十八年（1486）二月五日、『科注法華経』全部、借之西坊。
- 18、二月八日、音首座以『禪林僧宝伝』上・中・下三冊付与、下卷元通伝有垂跡人之田、『左伝』宣公十一年有此語、命董引之、題於上云。
- 19、二月十一日、本居士至、話及『千金方』廿七。
- 20、二月十二日、本居士袖『千金方』至、忍上人手『注心賦』三冊而至、借於予、予見之不釈手。
- 21、三月廿四日、本居士至、手『茶棗経』云（後略）。
- 22、四月七日、寿侍者至話移時、『新唐書』全部四十冊、寿公送而付之。『李白伝』引見。
- 23、四月十三日、宗住至、返『篆韻』。
- 24、七月八日、証忍上手解脱上人所作之『愚迷発心抄』一卷而至。
- 25、七月廿一日、外郎陳狀、謝『杏林亭詩』。鎮首座借『禪林類聚』於少林。
- 26、七月廿四日、忍上手元章「梅軸」並「翡翠」之幅而至。

- 27、九月十一日、忍上人至、手『観無量寿経疏』而至。
- 28、九月晦日、本居士至、睡足、手『在先録』一卷並『周易』倭本一卷而付予云。
『在先録』者予所欲見也。
- 29、十月一日、五郎二郎明日二日可渡唐荷云云、衆評議移剋、『旱霖集』『天廚禁嚮』⁽¹⁵⁾『天錫詩』三部、出百文以買之。忍上人仮以『法事讃』一卷。
- 30、十月三日、了成九郎仮以書『大藏經六義』廿五、『群疑論』⁽¹⁶⁾一卷、『梵岡古跡』上下、『浄心誠観』二冊、『同発真鈔』三冊、『肇論』三冊、已上六類。
- 31、十月八日、龍書記書子昂所書之詩、甚妙。
- 32、十月十一日、永昌主人至云、杜訓（杜甫詩文）之可仮。
- 33、十月十三日、了成九郎至、『周易』一部、『源信往生要集』一卷並抄手而至、借於予。
- 34、十一月八日、了九居士至、手『藥師經』飯家。鍾鳴飯云、『勝曼經有疏』四卷、許借於予。

以上の資料から判明するのは、第一に、当時各禅院の間で書籍の交流が頗る頻繁であったこと。第二に、書籍を大切にし、その貸借関係を明記していたこと。第三に、唐本を家宝として珍藏していたこと。第四に、一部の珍本は、利用者を限定、ないしは秘蔵にして、公開しなかったこと。第五に、一部の中国の原書（『医書大全』『周易』など）を日本で覆刻したことが分かる、第六に、重要な漢籍、例えば『旱霖集』『天廚禁嚮』『天錫詩』などは、百文の銭を出しても購入している、等の事実である。

六、その他

日記には、この他にも、様々な書籍や中日交流に関する記事が記されており、整理すれば以下ようになる。

- 1、文明十六年（1484）五月二十三日、趙子昂長子立舍人、十六歳而亡、子昂躬写『六諭経』、献本師中峰、中峰閱過一百遍、且作長頌、書之卷尾。

⁽¹⁵⁾ 『天廚禁嚮』、三卷、作者恵洪は宋代著名な詩僧である。

⁽¹⁶⁾ 『釈浄土群疑論』の略称、七卷、唐千福寺懷感著。

- 此雲門梅嶺老人付予、近日自京而至、此日焚香誦之。
- 2、十二月十三日、靈巖真前設供九拜、『大学』。
 - 3、文明十八年（1486）正月八日、舩舟（遣明船）多載医書云云。
 - 4、三月廿一日、「山寺饋茶知穀雨、人家插柳記清明」、陸放文翁『劍南統稿』有此句、予云。『全室外集』云、兩岸人家插楊柳、始知今日は清明。
 - 5、四月八日、予少時読元人『五雲漫稿』云者、有繫之二字、蓋日本ノ筆縛云ト同矣。
 - 6、四月十一日、話及『靈棋經』。
 - 7、五月十日、分『灸經』。
 - 8、七月六日、話及了庵之語唐人⁽¹⁷⁾作序之事、寧波府之大人作之云云。
 - 9、七月九日、『舩田集』。
 - 10、八月九日、肇鄂老人、自京師至、伊、熊兩祠所詣也、『五灯会元抄』入無手云。
 - 11、八月廿五日、慈祥至、『早霖集』在市上云。珠等至、求書所作之耆婆贊語。柏上主人大明詩人為木工助所作之詩篇、要予之一見云。
 - 12、九月十二日、『統感異集』。

おわりに

鎌倉時代末から室町時代にかけて、日本の文化を支えていた所謂五山文化とは、禪林の文化であり、当時は禅僧たちこそが日本を代表する文化人であった。円爾弁円が帰国する際に持ち帰った数千巻の書籍において、内典が二百六十部であるのに対して、外典が一〇〇部も含まれていたことは、それを象徴する事実であって、日本禅僧の一般教養の特色を示すものと考えられる。言い換えれば、五山文化はこのような教養の基礎の上に開花し、禅僧たちはこのような教養をもった上で、外交文書を担当し、対外的な使者の役割を担っていたと考えるべきであろう。彼らは、いわばこの時代の主人公であり、この時期の中日書籍交流の特色をも決定づけた存在なのであった。

最後に、大庭脩氏の観点を概略引用することによって結びとしたい。

(17) 明人黄隆が入明僧了庵桂悟の語録に書いた序である。

室町時代の僧侶による渡来漢籍の現存するものについて、以下の点に注意する必要がある。まず、足利学校や金沢文庫のように武士が設立したものであっても、教育や運営に当たっていたのは僧侶であり、寺院に備える書は禅宗のみならず日蓮宗においても外典類を多く持っていた。僧侶はまさしく当時の知識人として仏学以外にも広い教養を持っていたことは、僧侶の日記に明らかである。このように日本に伝来した漢籍は、仏僧と関係が深いことが特色である。次に忘れてならないのは、五山版である。従来の日本の出版が、「春日版」「高野版」など仏教の出版が多かったのに対し、「五山版」では仏典以外の出版が行なわれて、全体の約三割が外典となった点は、僧侶の持渡書に外典が入るのと同じ割合である。そして五山版の出版で見逃し得ないのは、元版など中国の版の覆刻が少なからずあることと、中国人刻工が渡来して出版作業に従事していることである。また、外典の出版されるものには辞書が多いことは、日本国内の需要の傾向を示すものと言わねばなるまい⁽¹⁸⁾。

⁽¹⁸⁾ 大庭脩『漢籍輸入の文化史－聖徳太子から吉宗へ－』、研文出版、1997年、86-91頁。

<ABSTRACT>

The Epitome of China-Japan Exchanges via Books as Recorded in *Shoken Nichiroku*

CHEN Xiaofa

In the diary *Shoken Nichiroku* written by Kikō Daishaku, who was a priest of the Rinzaishu sect in the middle of Muromachi Period, there is much information about China-Japan exchanges via books. It is possible to categorize such information as follows: Chinese classics for daily reading, lectures about Confucian texts in temples, Chinese classics obtained by Japanese missions to Ming China, lending books between temples, and communication of Zen monks via Chinese classics. Japanese missions to Ming China brought back many Chinese classics, and there are not a few books on painting and writing, literary works and medical books that were presented by Chinese litterateurs. Zen monk poets like Kikō Daishaku, for whom reading was a daily activity, extensively read books in many fields. Added to this, Kikō Daishaku obtained books which he wanted to read, not only from his temple, but also by exchanges with his friends or other temples.